てね……。大變賑かなお葬式でせうね。』

こんな話を母親と大家の上さんとが窓の外で話してゐるのを耳にしながら、蝶次は家の中に引籠つてゐた。何だか、それを見たり聞いたりするのが怖いやうな氣がした。

其日は向うの路を輾つて行く車の音だの、人の足音だの、話聲だのが絶えず蝶次の寢てゐる枕元に聞えて來た。午後には、一層それが際立つて賑かになつて來た。遂に、蝶次も出て見る氣になつた。

その時には、腕車はもうさう澤山並んではゐなかつたが、家の外に溢れた人達がぞろ〳〵其處等に立つてゐるのが松林の間に見えてゐた。海老茶の袴だの、白いリボンだのがチラ〳〵交つて見えてゐた。

蝶次はすぐ家の中に入つた。午後の熱が急に惡氣を催して來たのである。

『母さん、外に出たら寒くなつたよ。もう一枚、蒲團をかけて下さい。』

かう言つて床の中に體を横へた。惡氣につゞいて熱が夥しく出て來た。母親が午後の牛乳を持つて行つた時には、顔が熱で赤くなつてゐた。もう少し前に蝶次が自分ではかつて枕元の卓の上に投り出して置いた驗温器は三十八度六分のところを示してゐた。

熱と共に咳嗽が出て來た。母親が夕飯の仕度を放たらかして、長い間摩すつてやつても、容易にそれが止まらうともしなかつた。やがて日は暮れて行つた。蝶次は、夢のやうに、人の喧しく騷ぐ聲や足音や、車の音を聞いてゐた……。行列……棺……燒場などが眼の前に幻影のやうに通つて行つた。で、咳嗽が一しきりつゞいてやむと、今度はウト〳〵とした昏睡が襲つてきた。額に汗をビッショリかいて熟睡してゐる蝶次の横顔を、洋燈は明るく照してゐた。

百

雪子と政次が東京から見舞にやつて來たのは、もう二月も末に近く、梅が白く垣根に咲いて

ゐる頃であつた。碗車の上の二人の姿は、絶えず路の兩側の人々の眼を惹いて、段々海の見える方へと近寄つて行つた。

車の音が聞えて、次に、あづま下駄の小刻な賑かな足音がしたと思つて、四疊半の高窓の障子を明けた母親は、

「まア、めづらしい！」

かう言つて、急いで立て、上り端の方に行つた。

「まア、めづらしい！　よく遠い處を來て下さいましたね。」

「隨分、遠いのね、母さん！」

かう言ふ聲が奥に寢てゐる蝶次の耳にも聞えた。しかし蝶次には始めは誰だか鳥渡見當がつかなかつた。やがて賑やかな下駄の音がして、

「まア、大變でしたね！」

「こんな遠くまでね……」

などゝいふ母親の聲が繰返して聞えてゐたが、續いて上り端で、コオトを脱ぐ氣勢がした。

と思ふと、今度は母親は先に立つて入つて來て、

「雪子さんに、政次さんが來て下すつたよ、お前。」

「え？　雪子さん。まア！」

蝶次の顔には喜悅の色が忽ち漲るやうに充ち渡つた。蝶次が寢てゐた體を半分起した時には雪子の愛嬌のある莞爾した顔と、政次の肥つた血色の好い顔とが早くもその前に來てゐた。

「まアねえ……、よく來て下すつた——」

蝶次は胸が一杯になるやうな氣分で、昔の友達を見た。

見舞に來た人達には、蝶次の著しく痩せたのが一番先に眼に附いた。元から、さう肥てゐた方ではなかつたが、それにしても、

『まア、何んて痩せて小さくなつたんだらう！』
と、かう思つて雪子と敗次とは彦を見合せた。
『一度、お見舞に伺がはなくつてはすまない〳〵ッて、それは雪ちやんと逢ふ度に話してゐたんだけれど、つい、何やかやでね、母さん。去年の十一月の初めにも、明日行くばかりに支度までしたことがあつたのよ……。本當にね、もつと早くお見舞に上らなけりや義理がすまないんですけどもね——』
敗次はかう早口に饒舌つて、
『でも——段々好い方なんでせう。顔色もそんなにわるくはないわね。』
わざと隣に坐つてゐる雪子の方を見て言つた。
『さうね——思つたよりね。』
雪子もかう調子を合せた。

すぐ後をついで、
『でも、隨分田舍ね。こんな處にゐちや、誰だッて退屈しちまうわね、停車場からでも、隨分あると思つてよ……。病院は近いの？』
『え、すぐ、そこですよ。』
かう言つて母親は顔を其方に向けて見せた。
『海は？』
『海もすぐそこですよ。』
其處に土産が出されたり何かした。
『蝶ちやん、これが好きだつたのね。』
雪子は仲見世で買つて來たお馴染の菓子などを出した。賑やかな陽氣な二人の言葉は、病人の眼の前に、再び昔の派手な世界を擴げて見せた。夜は仲見世の賑かな通なども思ひ出された。

百一

朋輩の快活な笑聲も、蝶次を以前の派手な生活につれて行つた。芝居、役者、自動車、電燈の明るい室――さういふものが二人の態度やら氣分やらの中に名殘なく織込まれてゐた。

『東京に歸つて、お座敷に出られるやうになつたら、それこそ何んなに嬉しいでせうね。』

など、蝶次は染々と言つた。

『それでも、もう、ぢき治るんでせう？』

『暖くでもなれば、ちつとは好い方に向くだらうと、そればかりを樂みにしてるんですがね。』

かう言つた母親の言葉には、失望の調子がそれとなく見えてゐた。

政次も雪子も少しも以前と變らない調子で、種々なことを話して聞かした。殊に、政次のガラ〳〵した何事にも頓着しないと言つたやうな調子はなつかしい心持を蝶次に起させるに十分

であつた。

『駄目よ、ちつとも好いことなんかありやしない。それに靜かなものよ。正月なんかでも、まご〳〵すると、お茶を挽くんだからね。』

かう言つて、土地にあつた話を何彼と面白さうに話して聞せた。常磐といふお酌上りの子が定子さんの旦那を取つて一悶着起つた話や、桃千代さんに、上方の門跡の御連枝か何かの客が出來て、毎日自動車で通つて來る話や、よく皆して出入したお茶屋のお年といふ女中が、箱屋の繁どんと關係してゐて、それが長い間知れずにゐたのが、ふとしたことから洩れて二人ともそこにゐられなくなつた話などがそれからそれへと盡きずに話し出された。

『まア、あのお年さんが……』

それと聞いた時、蝶次は吃驚したやうに言つて、

『繁どんはあゝいふんだから、不思議はないけれど、あのお年さんがね、まア、あの堅い人が

ね。」
「それも長いんだから、ちよつと吃驚するわね。三年ごしだッて言ふんだものねえ。」
「何うしてさう解らなかつたでせう。」
「兩方で惚れてたのね・・・、それは屹度、あのお年さんがえらいんで、隱しておいたのね・・・
あの人に、そんなことがあらうなんて、何うしたッて思はれない風だもの・・・。」
「さうね、不思議のやうね。」
かう言つた蝶次は、靜かに、丁寧な口の利き方をするその女中を眼の前に浮べてゐた。蝶次
はそのお茶屋では、殊にその女中と交情が好くつて、いろんなことを互に隱さず話し合つたこ
となどもあつた。
「わからないものねえ！」
「本當よ、皆な吃驚したわ。」

「それで、何うしてるの？　今？」
「それが面白いのよ。女中にも似合はない、素人のやうな惚れ方をしてゐるのよ。何うしても
繁どんと夫婦になれないなら、死ぬなんて一時は大騒だッたわ・・・。繁どんもあの人に似合は
ないほど眞劍なのよ。」
「ぢや、繁どんと秀助さんとは何うして？」
「秀助さんと深いやうに見せかけておいて、實はお年さんとの仲を祕密にする爲めに、さうし
て置いたのね・・・」
「まァさうなの！」
蝶次はその時分を思ひかへすやうにして言つた。

百二

誰の旦那、彼の旦那、今一番仕合せなのは誰だとか、誰さんはあれからよし町に行つて、そこもいけなくなつて神樂坂に住替へをして、派手な赤いもの盡しの扮裝をして、

『あなたヤ！』

など、言つてゐるといふ話だのが猶ほ長い間その一間を賑かにした。政次の快活に笑ふ聲は外まで聞えた。

『私、御免蒙つて、寢てよ』

蝶次は初めは懷かしがつて、身を床の上に起し、話したり笑つたり何かしてゐたが、少し疲れて來たといふやうにかう言つて、體を床の上に横へて、髪の亂れた頭を枕に當てた。

『熱が出たんぢやないかい？』

母親が心配して傍に寄つて行くと、

『何ア、出たッて言ふほどぢやないけれど……少し』

かう言つて自分で額に手を當て見た。

『好い氣になつて、餘り私達がお饒舌をしたからぢやなくつて？』

雪子は心配さうな調子で言つた。

『いゝえ、さうぢやないんですけれど、話なんかしてゐて、何うかすると、急に熱が出て來ることなどがあるんですよ』

母親は病人に搔卷をかけてやりながら、

『何うも困りますよ』

『何に、大丈夫よ』

蝶次の笑つた顏は、艶めかしいあざやかな色をしてゐる。

二人は猶ほ一時間ほど其處の一間にゐた。やがて蝶次が眠つてゐる間を、四疊半の長火鉢の前に來て、聲を低くして、母親と種々なことを話したりなどした。

『さうなの？　母さんも大變ねえ』
かういふ雪子の聲が聞えるかと思ふと、
『あれで今日は落附いてゐる方なんですよ。咳嗽でも續けて出ると、とても、私一人ぢや看病が出來ないと思ふことなどもありますよ。此間の夜など、何うしても咳嗽が止まらないで困つて了ひましたよ』
抔といふ母親の聲が聞えたりした。
『何うしてこんな病氣に取附かれたんでせうね』
染々同情した政次の聲もした。
四五日前、血を咯いた話をも、母親は低い聲で話して聞かせた。
『入院させなければいけないッて、院長さんも度々言ふし、私も勸めるんですけども、何うしても、あれが厭だッて言ふんですから困りますよ……。え……それでもね、あの旦那はね、深

切にして呉れますよ。日曜には屹度來て呉れますし、淋しければ社の方を暇を貰つて來てゐても好いなんて言つて呉れますよ……。ですから、あれもね、今ぢや旦那ばかりを頼りにしてゐますのよ』
『よくねえ、感心に……。今時分、そんな旦那なんかありやしませんよ』
かう言つて雪子の聲はやゝ涙を帶びてゐた。
暫くしてから、折角來たんだからと言つて、二人は揃つてそこらを見に出たけた。母親が下駄を裏に廻してやると、二人はそれを穿いて、病院の方へと行つた。で、その姿は暫く松林の中だの、砂山の上だのに見えてゐたが、やがて歸つて來て
『春にでもならなけりゃ、海は寒いわねえ』
かういふ雪子の聲が聞えてゐた。

『大變に惡いのね』

『あんなにわるいとは思はなかつたね、本當に。あれぢやもうとても治るやうなことはないねえ・・・・』

『本當だね・・・・。可哀相に――』

雪子と政次は、海に臨んだ旅館の一間でさういふ話をした。二人は、蝶次の家を出てから、車夫に賴んで、わざ〳〵廻り道をして、その旅館へと伴れて來て貰つた。海岸に來た次手に、湯にでも入つて、ゆつくり夕飯でも食べて行かうと思ひ立つたのであつた、二人の坐つてゐる前の硝子障子からは、午後の日影を受けた碧い海が明るく見えてゐた。

『何うしてあんな病氣にかゝつたんだらうね？』

『本當にね』

政次はかう言つたが、

『本當に考へると、怖いねえ。小千代さんだツて、今助姐さんだツて、矢張さうなんだからね皆なお客から引受けるのよ』

『小千代さんもさうかえ？』

『ほら、お前さんも知つてゐるぢやないの？　あの旦那を・・・・蒼い顏をした・・・・』

『蝶ちやんのも矢張さうねえ・・・・。さうすると、矢張皆なお客から引受けるのかねえ・・・・。厭だねえ、いくら好いた人だツて命がけぢやねえ』

『好いた人なら好いけど・・・・それならまだあきらめられるけど、そんな譯ぢやないんだから、猶詰らないねえ』

『厭だ、厭だ！』

雪子は心からさう思つたやうに、投げるやうに言つた。
「でも、矢張運だよ。さう澤山病氣のお客ばかりありやしないから」
政次は笑つて、
「さう言へばお前さんのあのお客などもあやしいよ」
「厭なことをお言ひでないよ」
「だツて、厭に咳嗽をしてるぢやないかそれに、顏色に病氣がありさうだよ。」
「いゝよ、もうそんなこと。」
「でも、用心しないといけないからさ。あゝいふ顏色をした人に、あの病氣はあるんだから‥‥。蝶ちやんのあのお客だツて、さうぢやないかえ」
「さう言はれゝばさうね‥‥。厭だ、厭だ。ぢやもうよすわ。」
雪子はかう言つて、

「小千代さんも餘程わるいのかしら?」
「もう、長いことはないらしいよ。此間。ちよつて見舞に行つたら、痩せて、元の姿はなくなつて了つてゐたよ。蝶ちやんよりも、もつとしどい?」
「さう‥‥可哀相ね」
其處に、女中が湯を知らせに來た。
「ぢや、一緒に入らうね。お客とはよく來るけども、お前さんと一緒にかういふお湯に入るのも面白いね」
かう政次は言つて、手拭を下げて、長い廊下を湯殿へと行つた。雪子はあとから續いた。

百四

蝶次は遂に入院した。

それは寒い寒い風が凄じく松を鳴してゐる日であつた。看護婦が負つて行つて上げませうと言ふのを、蝶次は達つて辭つて、母親と男とに護られて、靜かに裏門の道を病室の方にと歩いて行つた。

病室は南に向いた廊下の角のところになつてゐた。蝶次が其處に入つて行つた時には、もうあたりは綺麗に掃除されて、寢臺のシーツは雪のやうに白く一間に際立つて見えてゐた。室の一隅には瓦斯が來てゐて、ちよつとした煮物などは、すぐ其處で出來るやうになつてゐた。寢臺の下の二疊敷の處に母親は茶簞笥だの角火鉢だのを家から運んで來た。

『來て見ればさうわるくもないだらう?。』

かう男が笑ひながら言ふと、

『さうね、きちんとしてゐて好いわね。』

珍らしさうに寢臺の上に體を横へて見て、

『何うしても、それは、病院の方は好いにはきまつてゐるけれど…貴方が大變ですからね。さうでなくつてさへ、もう十分御世話になつてゐるんだから』

『そんな心配はいらんよ。』

『でもね…』

蝶次の顔はすぐ曇つて來た。

『でもね…本當にね、考へると私は…』

『もう好、よ…、それより氣長に保養するやうにする方が好いよ。』

看護婦は種々なものを其處に運んで來た。體温表を壁にかけたり、病床日誌を寢臺の傍に吊したり、金盥を其處に持つて來たり、藥罐を藥棚に載せて行つたりした。副院長がやがて看護婦をつれて見舞に來たが、

『とう〳〵入院しましたね。これの方が何の位好いかわからない。此處で、ゆつくり氣を落附

けなさい』

かう言つて莞爾笑ひながら、病人の白い胸に聽診器を當てた。

その日は男は終日其處の二疊に坐つてゐた。成たけ、病人の感情を刺戟しないやうに、やうにつとめてゐたが、何ぞと言つては、女の眼から涙の流れるのを男は見た。母親や看護婦のゐる前では、それでも遠慮してさういふ話もしないが、その姿が見えなくなると、蝶次は話をすぐ其方へと持つて行つた。

『貴方、さつき言つたこと本當ね？』

『さつき言つたことつて？』

『もう忘れてゐの？』

かう言つた女の聲は高かつた。

『ぢや、貴方も頼りにならない！』

『何んだえ、一體・・・』

『度々來て下さる筈ぢやないの？』

『それか？　それなら解つてゐるよ。』

『貴方が始終ゐて下さると好いんだけどね・・・』

蝶次の聲は涙を帶びてゐた。

『出來るだけ來るよ・・・。そんなことは心配せん方が好いよ。』

松林の中の家には、母親の遠い親類に當る婆さんが、二三日前から留守番に頼まれて東京から來てゐた。其夜は男は遲くまで病室にゐた。蝶次は何うしても歸つて好いと言はなかつた。

『私を一人置いて行つてはいやよ。』

かう絶えず言つた。男は病人の眠つてゐる隙を窺つて、こつそり扉を開けて外に出た。夜は十時を過ぎてゐた。外には寒い風が吹いてゐた。

百五

此頃病人には過ぎ去つたことが絶えず頭に繰返されてゐるやうに見えた。烈しい咳嗽の後で大きな眼をぱつちり開いて默つて空間を見てゐるやうなことが多かつた。何うかすると、涙がぽろ〳〵と頰を傳つて落ちた。

『またお前何か考へ出してゐるのかえ？』

始めは母親もかう言つて、傍に行つて慰めたり何かしたが、後には默つて捨てゝ置くより他に仕方がなかつた。病人は壁の方に顔を向けて、悲しさうに歔欷を續けてゐたりなどした。

『私が惡いんだから・・・。本當にわるかつたんだから。』

こんなことを獨りで言つて、誰かに詫びてゐるやうな眞似をしてゐることもあつた。過ぎ去つた男の顔、それが熱に浮かされた蝶次の頭に一つ〳〵浮んで通つて行くらしかつた。ある夜

のことであつた。

『私がわるいんだから、堪忍して下さい！』

かう幾度も繰返して言ふので、母親が傍に行つて、

『お前、何うしたんだえ！』

と聲をかけると、

『母さんかえ！　まアよかつた。この手を引張つて下さい、增田さんが今遣つて來て、それは怖い顔をして、何うしても伴れて行くッて言ふんだから。』

じつと何かを見るやうな眼附をして、

『それ、母さん、そこに增田さんが來てる！　增田さんが來てる！　手を、手を引張つて！』

『大丈夫だよ、誰もゐやしないよ。』

『ゐやしない？　そら、其處にゐるぢやないの？　そら、其處にゐる！』

「何處に？」
「そら、其處に、壁の處に！」
病人の眼は屹と据わつてゐる。
「何んにもゐやしないよ。それは影だよ、棚の影だよ。」
病人は母親の手を堅く握つたまゝ、苦しさうに呼吸をついて、
「母さんが來たもんだから、行つて了つた……。母さん手を堅く握つてゐて下さいよ、また來るといけないから。」
「大丈夫だよ、夢を見たんだよ。」
「本當に來たんだよ。母さん、怖かつた。本當に怖かつた……。其處に來て、私の手を引張つて、どうしてもつれて行くッて、言ふことを聞かないんだもの……」
「そんなことはないよ。母さんが此處にゐるから大丈夫だから、靜かに氣を落附けなけりやい

けないよ。」
「母さん！」
顏を半ば母親の方に向けて、かう呼びかけた蝶次の聲には何とも言はれない、悲しい突き詰めた調子が籠つてゐた。
「母さん！　何故、私はこんなに苦しむんでせうね。母さん……。私はわるいことを爲たんでせうか。罪になるやうなことばかりしたんでせうか。」
かう言つてゐるかと思ふと、すぐ眼を大きく見張つて、
「それまた來た！　其處に來た！　迎へに來たッて行きやしないよ。私もわるかつたけれどお前さんだッてわるいんだから……。母さん、早く、早く、入つて來るから、そこから入つて來るから、突出してやつて下さいよ。」
「氣を落附けなくてはいけないよ。お前、誰も來てゐやしないよ。」

『それ、其處に……。怖い顔をして來て立つてゐるぢやないの？』

百六

『何んにも居やしないぢやないか。』

『そこにゐるよ。それ其處に！』

『お前、夢だよ。夢を見てゐるんだよ。』

『あゝ入つて來た。とう〳〵入つて來た。增田さん、山内さん、澤田さん——堪忍して下さいよ。皆な私が惡るかつたんですから。ね、何うか堪忍して下さいね。』

誰か多勢其處に來て、袖を引張つたり襟をつかんだりしてゐるらしく、母親には見えた。病人は細い手を伸して、髪の亂れるにも頓着せず、一生懸命に唯々それを防がうとあせつてゐる。母親も流石に氣味がわるくなつたといふやうに、慌てゝ扉を押して廊下へ出て、急に看護

婦のゐるところへと行つた。

看護婦と宿直の醫師の出かけて行つた時には、病人は、顔を打伏しにして、スヤスヤと寢てゐた。あんなに騒いだのはあれはうそではないかと思はれるやうに靜かに寢てゐた。解けた髪は長く寢臺の傍に垂れ下つてゐた。

脈を取つた醫師は、

『熱がありますね！』

すぐ言葉を續いで、

『え、熱の故です。少し熱が出るとさういふことがよくあります。ひよつとした加減で、意識がなくなつて了ふんですな。』

看護婦が驗温器を腋の下に挾んだり何かするのを立つて見てゐながら、

『なあに、御心配になることはありません。じつとして靜かにして置きさへすれば、ぢき落附

きますから。』

『私も、氣味がわるくなりましたもんですから……』

かう言つた母親は、おど〳〵と物も手に附かぬといふ風であつた。

『何アに、大したことはありません。御心配になることはありません。落附くやうな藥を上げますから。』

看護婦の驗温器を檢めるを見ながら、

『九度五分位ありますか。』

『九度一分。』

看護婦は驗温器を鞘に藏ひながら言つた。

醫師はやがて出て行つた。看護婦もつゞいて出て行かうとすると、

『もう少しゐて下さい、氣味がわるう御座んすから。』

かう言つて母親は無理にそれを引留めた。暫くすると、もう一人の方の若い看護婦が藥を持つて入つて來た。で、母親は髪を直したり、打伏になつたのを仰向にしたりして遣つたが、病人は少しも知らずに、唯ぐつたりとしてゐた。疲れた白い顏が一間の中にくつきりと見えてゐた。

ふと病人はぱつちりと眼を見開いて四邊を見廻した。

『何うだえ？　お前？』

『私、何うかして？』

『まア、靜かにしてお出でよ。氣が附いたかえ？』

『何うかして？　私？』

病人は頻りにそれを氣にした。

それからさういふ發作が度々起るやうになつた。それは夜ばかりではなかつた。少し熱が高

いと思ふと、すぐ違つたことを種々と言ひ出した。男が遣つて來た時にも、一時間ほどさういふ狀態でゐた。男は女の据わつた眼と、荒んだ皮膚に、尖つた鼻とを言ふに言はれない悲しい心持で見た。

『左の方ももう大分わるいですな。』

かう言つた院長の言葉をも男はその時思出してゐた。

でも、熱のない時には、平生と少しも變つた處はなかつた。

『來て下すつたの？　まア嬉しい！　もう歸さないからいゝ！』

などゝ笑ひながら言つたりした。時には手を堅く握つて、じつと男の顔を見詰めた。大きな涙を湛えた眼に一杯に漲らせながら……。

百七

ある日眠つてゐる間に男がこつそり歸つて行つて了つたといふので、病人は一日焦れたり怒つたり泣いたりしてゐた。

『母さん、もう其處にゐないで下さい。母さんの顔は見るのも厭だ！』

こんなことを言つて顔を掩つた。

『今度來たら、この病室の内に入れないでお呉れ、いゝかえ？　母さんあんな男なんか來なくつたッて好い……。あんな薄情な、あれほど言つたのに默つて歸つて行くやうな男になんか逢ひたくない。』

いつもの柔しい弱い海綿のやうな心から、何うしてこんな言葉が出るかと思はれた。母親は心の中では泣きながら、病人の言葉に逆はぬやうにと、廊下に出て、長い間立つて居た。

寒い〳〵風が吹いた。小さな砂が硝子窓に當つて、バラ〳〵と音を立てた。春になつて暖かにでもなつたらと思ふその春は容易に遣つて來さうにも思はれなかつた。廊下の盡頭からは、

碧い海が見えて、單調な波の音が絶えず聞えてゐた。

『本當にお困りでせうね。』

向うの病室にゐる女學生風の女の看病に來てゐる中婆さんが、いつも同情して母親の話相手になつて呉れるが、其日も丁度其處に出てゐて、何彼と話しながら、廊下を並んで歩いた。

『本當にね……あなたのもおわるい？　考へると、何といふ因果なことだと思ひましてねえ……。さうかと申して、病人の焦れるも無理は御座いませんけれど。』

など、語り合ふ聲がきれ〴〵に聞えた。

『内のはね、今朝、紅いのを吐きましてね……』

など、中婆さんは聲を低くして話した。

廊下を歩く看護婦の草履の音が四邊に反響して高く聞えた。今朝、危篤に陥づたといふ病室からは、醫員だの、看護婦だのが出たり入つたりしてゐた。

『厭ですねえ！　わるいんですつてね。』

など、二人は話し合つた。

一時間ほどして、牛乳の時間だと思つて、母親は音のしやいやうに扉をあけて病室の中に入つて行つた。病人は壁の方に顔を向けて默つて寢てゐた。牛乳を暖めて、好い加減にして持つて行くと、病人は默つてそれを手に取つて飲んだ。

此頃では咳漱につれて、濃厚な痰が出るやうになつた。何うかすると血の交つた痰が出た。容易に途切れない咳漱の脊を摩つてやつてゐると、

『苦しい、苦しいよ。母さん。これも皆な私がわるいんだよ。私が罪が深いからだよ。』

など、顔を眞赤にして言つてゐた……。その咳漱がまた出て來た。

その翌日の午後であつた。母親の姿は、病院の電話室へと入つて行つた。母親は長距離電話を男の出てゐる社にかけた。

「さうです。母ですがね、私ですがね……。昨日歸つたばかりで、本當にお氣の毒ですけどね。病人が逢ひたがつて仕方がないんですがね……。いゝえ、別にわるいッて言ふ譯でもないんですけれど、心細いことばかり言つて仕方がないんです……。來て頂けるでせうか……。さうですか、何うも難有う御座います。それでは――」

かう言つてその電話は切れた。

母親が病室に入つて行くと、

「何うして？」

「來て下さると……」

「さう――」

病人は嬉しさうにしてゐた。

百八

男は社の方を辭つて、病院に來て居た。

「お前今日からは、當分此方に來てゝ下さるんださうだから、よくお禮をお言ひよ」

かう母親が言ふと、病人も嬉しさうに莞爾してゐた。

もう自分で起きて歩くことは出來ないやうになつてゐた。朝から風の吹く日などには、薄い日影のさした、硝子の外から金網を張つた窓の方に顔を向けながら、

「今日も寒いね。」

などゝ言つた。熱にうかされた發作は此頃起らなくなつたが、痰は日增に多く出るやうになつた。容易に止まらない咳嗽に、病人の體は全く疲れ切つて了つた。

でも、男の顔がその病室の中に見えてゐるといふことは、病人に取つては、何れだけ慰藉で

あるか知れなかつた。男が寢臺の隅の方に行つて、椅子に腰をかけて、本などを讀んでゐると、

「何處かへ行つて？」

眠りから覺めた病人はかう言つて、其處等に見えない男の顔をさがした。

「そこにゐるぢやないか」

母親が其方を向いて言ふと、

「何處に？」

病人は少し起上るやうにして、男の顔を見て、

「あゝゐた、ゐた！」

「何うしたんだえ？」

男が本から顔を上ると、

「いゝえ、貴方の顔が見えないッて言ふから」

かう笑ひながら母親が言つた。

男は病人の方から顔の見えるところに椅子を移した。

看護といふほどのことは出來ないまでも、母親を援けて牛乳を飲ませて遣つたりなどした。此方の肩が痛いから、寢がへりを打ちたいと言ふ時に、體を抱いて此方に向かせてやつたりした。胸や、足や、手などの痩せたことは、それは知らぬものは吃驚するほどであつた。御座敷の中にすらりとした姿を鷹揚に運んで行つたその綺麗な女だとは何うしても思はれなかつた。

「痩せたね——」

小聲で男はかう母親に言つた。

散歩から男は歸つてなど來ると、

「何處に行つたの？」

『ちよと其處まで・・・・』
『砂山の方まで？』
『そこまでは行かなかつたけれど・・・・、松原の處まで行つて見た。』
『今日は暖かでせう』
傍から母親がかう口を挿んだ。
『え、今日は風がないから少し暖かです、海も靜かです。』
『一緒によく歩いたものね』
かう言つて病人は考へるやうにして、
『もう、行きたくつても歩けない』
『そんなことはないよ』
病人は黙つて男の方を見てゐた。種々のことが思ひ出さるゝやうに見えた。

『あの時分はまだそれでもそんなにわるくはなかつた。』
三人の胸には此時さういふ同じ考が上つてゐた。
『春にでもなつたら！』
母親は傍から慰めるやうに言つた。
風の吹かない日は、海岸は流石にもう暖かくなつてゐた。草の中には菫が咲てゐたりした。
小鳥の啼音も多かつた。

百九

『もう一度海が見たい。』
病人は幾度となくかう言つた。
今日は天氣が好いねえ・・・・。もう春だ、ねえ・・・・。母さん、海が見たいよ。今日こそつれて行ぐ

つて見せてお呉れ」
「あとでまた咳嗽でも出ると困るからね。」
「大丈夫だよ」
「ぢや、旦那に相談して」
それでは負つて伴れて行つてやらうと男が言つたが、丁度その時分から熱が出たので、その日はその望みをかなへて遣ることが出來なかつた。翌日は寒い風が吹いた、昨日の暖かい春は何處に行つたかと思はれるばかりであつた。病人は遠い高い波の音を聞いて、
「今日は荒れてるのね、海が——」
など、言つてゐた。
翌日も翌々日も、病人を負つて外に出るやうな日和ではなかつた。松の音がさびしく病院の周圍に鳴つてゐた。

けれどやがてまた好い日和が續いた。鶯などが何處かで鳴いてゐた。ある朝、松林の中の家から遣つて來た男は、
「今日はもう少し暖ぐなつたら、つれて行つて見せてやらうね、海を。」
かう言つて病人を喜ばせた。
それは丁度正午近い頃であつた。母親と男とに助けられて寢臺の上に抱き起された病人は、嬉しさうに唯莞爾してゐた。寢臺から男の肩につかまらうとした時、傍から母親が言つた。
「大丈夫かえ！　お前」
その時は男はもう後から手を廻して病人を負つてゐた。男はかうまでも痩せて重量がなくなつたかと思つた。病人の小さな痩せた蒼白い顔は、男の肩の上に見えてゐた。
廊下の外れたところに、階段があつて、そこにベンチが二脚置いてあつた。そこは日がよく當るので、輕い患者達は、いつも其處に遣つて來て腰をかけて居た。その日も二三人は來てゐ

た。皆な男に負はれた重い患者の方を見てゐた。

「見えるだらう！」

「あゝ見える！」

病人は喜ばしさうな顔をして、遠くに――砂山を越えて遠くに展げられた碧い靜かな海に見入つた。

それは海水浴の小屋に腰をかけて、默つていつまでもいつまでも日が暮れるまでも見てゐたその海だ。粹けてゐる白い波こそ見えないが、打寄せる音はどう――どうと靜かに遠く聞えてゐた。

斜に孕んだ帆が一つ靜かに通つて行つた。

百十

「好い天気ねえ、今日は――」

朝の中はこんなことを言つてゐた。硝子窓から見える綠の草や、濕つた土や、晴れた空などをめづらしさうに病人は眺してゐた。機嫌の好ささうな顏色をして、絶えず母親や男の姿を目送してゐた。

男は傍に行つて、

「今日は心持が好ささうだね？」

「あゝ」

病人はかう言つて默頭いて見せた。

「何か上げやうか？」

「砂山……」

「牛乳でも上げやうか！」

『澤山……』

いつもの氣難かしいのに比べると、丸で別の病人の樣であつた。白い細い手を胸の上に當て、仰向に痩せた顔を見せて、靜かに寢てゐた。何うかしたんぢやないかと思はれるほど靜かに寢てゐた。

『春になつたのね、もう……』

窓からチラ〳〵する外の景色が限りなく病人の心を誘ふやうに見えた。此間から來て鳴いてゐる鶯は、今日も向うの松林の中で好い聲を立てゝゐた。

實際春は來て居た。松林の中には、いろ〳〵な草がもう小さな花を一杯に咲かせてゐた。土筆、野蒜、芹杯を摘む人も一人や二人ではなかつた。病院の裏門から海の方へ行く路には、麥が青々として、雲雀が高く空に上つてゐた。暖かく日の當つた芝生なども其處此處にある。男は今朝も、例の如く松林を拔けてやつて來たが、

『もう春だ！　もうぢき花が咲くだらう。』

かう思つて、去年の今頃のことなどを考へてゐた。

硝子窓のところに椅子を持つて行て、男は暫し外を見てゐると、

『貴方——』

低く呼ぶ聲が後に聞えた、振返ると、病人は此方を見てゐた。

傍に行くと、細い手を出して、男の手を堅く握つた。そして、じつと男の顔を見てゐた。そればかりでなかつた。やがてその眼から涙が流れて來た。

『お世話になりました……忘れはしない……死んでも忘れはしない……もう少し、傍に寄つて、……顔を見せて……』

かういふ言葉が斷片的に病人の口から洩れた。

『母さんは？』

暫してから、病人はかう言つて、また四邊を眺した。で、母親の顔を見ると、

『母さん！』

かう呼んで、握つてゐた男の手を離して、今度は母親の手を堅く握つた。

いつもに違ふ病人の容態を母親も男も氣にかけぬ譯には行かなかつた。やがて副院長の見舞の時刻が來た。副院長は型の如き診察をして、そして靜かに扉を明けて出て行つた。何も言はなかつた。午后は病人は唯眠つてゐた。

ところが午后四時過になると不意に恐るべき兆候が見え出して來た。醫員、看護婦、母親、男――さういふ人達に耳卷かれた病人の鼻は、ことに際立つて尖つて見えてゐた。

鷲の聲はまだ聞えてゐた。

大正十年二月十八日印刷
大正十年二月廿五日發行

定價金壹圓八十錢

渦

著者　田山花袋

發行者　東京市本郷區弓町一丁目廿五番地　茅原茂

發行所　東京市本郷區弓町一丁目廿五番地　日本評論社出版部
振替東京九六七八番
電話小石川一九七一番

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
（印刷者）　荻原勝次郎

◆日本評論社發行圖書總目錄往復ハガキ申込次第進呈

◆創作小說書目◆

或賣笑婦の話	定價二、五〇〇	送料一五
德田秋聲著	女の執着	二、五〇〇 一五
岩野泡鳴著	燃える襦袢	一、七〇〇 一五
同	情か無情か	一、七〇〇 一五
同	焔の舌	二、五〇〇 一五
同	姉妹	二、三〇〇 一五
白石實三著	妹思ひ	二、三〇 一五
德田秋聲著	照る日の虹	二、三〇〇 一五
眞山靑果著	何處まで	三、〇〇〇 一五
佐藤紅綠著	結婚前後	二、三〇〇 一五
同	京美やけ	二、〇〇〇 一五
近松秋江著	戀の笈摺	二、三〇〇 一五
沖野岩三郎著		

■圖書目錄申込次第進呈■

391
258

終